

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 3 年目)

1. 研究課題

フーコー研究—人文科学の再批判と新展開

Foucauldian Studies : Reassessment and New Developments in the Human Sciences

2. 研究代表者氏名

小泉義之

KOIZUMI Yoshiyuki

3. 研究期間

2017 年 04 月 - 2020 年 03 月 (3 年度目)

4. 研究目的

今日おおよそコーパスが確定されつつあるミシェル・フーコー(1926・84)の膨大な仕事の中核には、西洋近代に淵源する「人文科学」の歴史的批判の試みが置かれている。実証研究の再読と哲学的考察を交差させ、狭義の認識論に還元されない政治的・実践的な射程をもつフーコーの仕事は、現在もなお世界の人文・社会系諸学において避けて通れない参照項であり、その重要性はますます高まりつつある。だが、フーコーを方法論として応用しようとする試みや、それぞれの分野でフーコーを継承もしくは批判しようとする取組みのなかでは、フーコー自身の仕事の変遷や内的一貫性が顧慮されることは必ずしも多くない。また、フーコー自身の仕事を対象とする研究はもっぱら哲学史や思想史の領域で行われ、フーコー自身が再検討の対象とした「人文科学」諸分野の動態にまで遡ってフーコーの仕事の意義を究明する研究は稀にとどまっている。本共同研究は、「人文科学」諸分野の第一線の研究者を結集し、フーコーの仕事総体の意義を現在の「人文科学」研究者の観点から多角的に明らかにするとともに、フーコーによる「人文科学」批判の歴史的価値と現時点でのその可能性を見きわめることをめざす。

At the center of Michel Foucault's colossal work, whose corpus is nowadays almost completed, one finds his attempts at a historical criticism of the "human sciences" originating in Western modernity. Foucault's work, which lies at the intersection of reviews of empirical research and philosophical speculation, has a wide political and practical range, which is not reducible to simple epistemology; it constitutes an indispensable reference in human and social sciences, the value of which is more and

more important in today's world. Yet, among the attempts to apply Foucauldian methodology in one's own field by either adopting or criticizing Foucault's position, those that analyze in depth the changes as well as the inherent consistency of his work are not numerous. Moreover, while Foucault's work is mainly examined from within the framework of the history of philosophy or the history of ideas, attempts at determining the significance of Foucault's own reexamination of the historical and contemporary movements in the different fields of "human sciences" remain rare. The objective of this research seminar is to enable leading researchers in various fields of the "human sciences" to work together in order to bring out the significance of Foucault's work in its totality, and to determine the historical value and actual potential of Foucault's criticism of the "human sciences".

5. 本年度の研究実施状況

本年度は全 4 回(ただし各 2 日)の例会(内 1 回は公開国際シンポジウム、及び公開合評会の形をとる)、及び公開研究会 1 回、公開講演会 1 回を催し、計 21 本の発表と、それに続く討論を軸に共同研究が進められた。しかし、新型コロナウイルス感染拡大リスクに備え、予定されていた最後の例会(第 5 回例会)を中止せざるをえず、不完全燃焼感の残る締めくくりとなった。しかし本年度は 9 月に、本研究班中間報告として、雑誌『思想』(岩波書店)上に計 10 編の論考(内 1 編は翻訳)から成る特集「未完のフーコー」を出版し、好評を得た。来年度 1 年間をかけて編まれる二冊の成果報告書に、この勢いをつなげたい。本年度の研究内容としては、前 2 年間の潜在的な傾向が顕著になり、フーコー最晩年のキー概念である「パレーシア」をいかに整合的かつ発展的に捉えるかという問いに、研究班全体の関心がいわば収斂していったように見える。それが第 4 回例会の両日を通じてのテーマになったことで、本研究班は事実上「パレーシア」によって締めくくられたといえる。

6. 研究成果の概要

最終報告書に記載

7. 本年度の研究実施内容

2019-04-20 特別例会(講演会)

The Will to Strategy: Foucault's Interregnum, 1976-79 発表者 WALKER, Gavin
マギル大学(カナダ)

2019-05-18 第 1 回例会(1 日目)

過剰な真理の fuite en avant——80 年代講義と『性の歴史』を併せ読む 発表者 市田良彦
神戸大学分割前夜と”迷える者”——「真理の勇気」周辺 発表者 布施 哲 名古屋大学

2019-05-19 第1回例会(2日目)

「われわれ」とは誰か?——パレーシアする主体の存在論 発表者 坂本尚志 京都薬科大学最後のパレーシア/パレーシアステースから初期まで遡行する——新しい真理の政治、真善美の存在論 発表者 小泉義之 立命館大学

2019-06-15 特別例会(公開講演会)

Foucault and Marx in the Contemporary World: War, Governmentality and Beyond 発表者 MEZZADRA, Sandro ボローニャ大学(イタリア)

2019-07-13 第2回例会(1日目)

福祉国家とネオリベラリズム——『生政治の誕生』の周辺 発表者 前川真行 大阪教育大学

監獄の科学、視覚のエコノミー 発表者 北垣 徹 西南大学

2019-07-14 第2回例会(2日目)

個体の真理・科学の行方 発表者 小泉義之 立命館大学

『言葉と物』における労働価値説批判と歴史 発表者 松本潤一郎 就実大学

2019-09-28 第3回例会(1日目)

心理・言語・性——ミシェル・フーコーによる精神分析の横断 発表者 上尾真道

『知の考古学』と「数学という例外」——ダヴィド・ラブアンによるミシェル・フーコー批判の紹介 発表者 隠岐さや香 名古屋大学

2019-09-29 第3回例会(2日目)

La fin de la clinique(臨床科学の終焉) 発表者 TAJAN, Nicolas 大学院人間・環境学研究科

まなざしと言語の関係について——『臨床医学の誕生』から 発表者 立木康介

2020-01-25 公開国際シンポジウム「批判と真理——パレーシアについて」(第4回例会1日目を兼ねる)

主体性、批判、真理 発表者 SABOT, Philippe リール大学(フランス)

ソフィストはいかにしてパレーシアストになったか? 発表者 市田良彦 神戸大学

2020-01-26 公開合評会「ドゥルーズ、フーコー、小泉の霊性」——小泉義之著『ドゥルーズの霊性』をめぐる(第4回例会2日目を兼ねる)

小泉『霊性』書へ□コメント 発表者 廣瀬 純 龍谷大学

霊的世俗性、序説 発表者 千葉雅也 立命館大学

(書評) 発表者 市田良彦 神戸大学

2020-01-30 特別例会(公開セミナー) Vérité et fiction selon Michel Foucault(ミシェル・フーコーによる真理とフィクション)

Michel Foucault et les aventures de la vérité 発表者 SABOT, Philippe リール大学

De l'imaginaire à l'esthétique : les fictions chez Michel Foucault 発表者 坂本尚

志 京都薬科大学

8. 共同研究会に関連した公表実績

【出版】〈中間報告書〉『思想』(岩波書店)9月号「未完のフーコー」(本研究班中間報告書を兼ねる:小泉義之「(思想の言葉)啓蒙と霊性」、藤田公二郎「生命的・主権的複合体——フーコーの人文科学批判の射程」、佐藤淳二「フーコーと表象のリミット——〈ラモーの甥〉から〈ルソー〉へ」、王寺賢太「ヘーゲルを模倣するフーコー——『狂気の歴史』のラモーの甥論をめぐって」、ダヴィド・ラブアン(隠岐さや香訳)「数学という例外」、立木康介「まなざし, 鏡, 窓——フーコーとラカンの『侍女たち』(上)」、中井亜佐子「旅する理論——エドワード・サイードはフーコーをどう読んだか」、上田和彦「告白とパレーシア——隷従化されない主体化を求めて」、上尾真道「狂気と生権力——70年代フーコーの精神医学研究」、箱田徹「人民の回帰?——フーコー戦争論のポテンシャルティ」)〈著書〉小泉義之『ドゥルーズの霊性』(河出書房新社、2019年6月)長原 豊『敗北と憶想——戦後日本と〈瑕疵存在〉の史的唯物論』(航思社、2019年7月)田中祐理子『病む、生きる、身体の歴史——近代病理学の哲学』(青土社、2019年5月)森本淳生(共編著)『マルグリット・デュラス〈声〉の幻前』(水声社、2020年3月)〈論文〉小泉義之「類としての人間の生殖」『思想』2019年5月号、pp. 8-26 小泉義之「天気の人——二世紀初めにおける終末論的論調について」『現代思想』2019年11月号、pp. 20-26 立木康介「まなざし, 鏡, 窓——フーコーとラカンの『侍女たち』(下)」『思想』2019年12月号、pp. 77-101 佐藤嘉幸「ヘーゲル的主体のアレゴリーとしてのヘーゲル受容史:ジュディス・バトラー『欲望の主体——ヘーゲルと二〇世紀フランスにおけるポスト・ヘーゲル主義』」『週刊読書人』2019年11月1日 坂本尚志『「分析手帖」と『マルクス=レーニン主義手帖』1960年代フランスにおける学知、革命、文学』『フランス語フランス文学研究』115巻(2019)、pp. 255-269 西迫大祐「ジャック・ヴェルジェスの司法戦略とミシェル・フーコーの哲学について」『法を使う/紛争文化』(法文化叢書)(国際書院、2019年11月)、pp. 207-229 MEZZADORA, Sandro, Class Struggle, Labor Power, and the Politics of the Body, ZINBUN, 50 (March 2020), pp. 57-69. 〈翻訳〉佐藤嘉幸:ジュディス・バトラー『権力の心的な生——主体化=服従化に関する諸理論(改訳新版)』(共訳)(月曜社、2019年12月)箱田 徹:サンドロ・メツァードラ「ヨーロッパの難民・移民と階級をどう見るか? 境界研究の理論的視座」(共訳)『季刊ピープルズプラン』第86号(2019年11月)、pp. 24-35 【公開講演会】MEZZADORA, Sandro Mezzadra, Foucault and Marx in the Contemporary World: War, Governmentality and Beyond(フーコーとマルクス 現代世界における「戦争」と統治性)(6月15日) 【公開シンポジウム】公開国際シンポジウム「批判と真理——パレーシアについて」(1月25日) SABOT, Philippe, Subjectivité, Critique, Vérité(主体性、批判、真理)市田良彦「ソフィストはいかにしてパレーシアストになったか?」 【公開セミナー】公開セミナー Vérité et fiction selon Michel Foucault(1月26日) SABOT, Philippe, Michel Foucault et les aventures de la vérité SAKAMOTO, Takashi, De l'imaginaire à l'esthétique : les fictions chez Michel Foucault

9. 研究班員

所内

立木康介、佐藤淳二、森本淳生、瀬戸口明久、藤井俊之

学内

田中祐理子(京都大学白眉センター)、武田宙也(京都大学大学院人間・環境学研究科)、TAJAN, Nicolas(国際高等教育院)

学外

小泉義之(立命館大学)、王寺賢太(東京大学)、市田良彦(神戸大学)、長原豊(法政大学)、上田和彦(関西学院大学)、布施哲(名古屋大学)、佐藤嘉幸(筑波大学)、廣瀬純(龍谷大学)、隠岐さや香(名古屋大学)、前川真行(大阪府立大学)、北垣徹(西南学院大学)、中井亜佐子(一橋大学)、千葉雅也(立命館大学)、松本潤一郎(就実大学)、西迫大祐(沖縄国際大学)、相澤伸代(東京経済大学)、藤田公二郎(西南学院大学)、櫻田和也(大阪市立大学)、箱田徹(天理大学)、上尾真道(滋賀大学)、堀尾耕一(一橋大学)、春木奈美子(龍谷大学)、久保田泰考(滋賀大学)、坂本尚志(京都薬科大学)

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	6 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	59 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
学内	3	2 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	14 (0)	0 (0)	0 (0)	6 (0)
国立大学	6	9 (2)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	31 (7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
公立大学	2	2 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	14 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
私立大学	12	12 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	78 (6)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
大学共同利用機関法人	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
民間機関	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)

外国機関	0	2 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (0)	2 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
その他	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	24	33 (3)	0 (0)	0 (0)	4 (0)	198 (13)	0 (0)	0 (0)	6 (0)

※()内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	16(11)
国際学術誌に掲載された論文数	1(1)

※()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合

掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
思想	12	フーコーと表象のリミット——〈ラモアの甥〉から〈ルソー〉へ	<u>佐藤淳二</u>

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

12. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

13. 次年度の研究実施計画

なし

14. 次年度の経費

なし

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

本共同研究は本年度で制度的に終了するが、研究班ユニットの緊密性を保ちつつ、2020年度一年間をかけて、最終報告書を編集、刊行する。準備されている報告書は、いずれも書籍の形で、以下の通り2冊を予定している。1/ 班員全員の論考を網羅する主要な報告書。本拠点の研究成果出版助成を利用し、岩波書店から2021年3月刊行の予定。2/ 本研究班の運営資金を補助する目的で班員2名(佐藤嘉幸、立木康介)によりそれぞれ獲得された科学研究費補助金によるプロジェクトのメンバー(全員が本研究班に所属)の論考、及び、本研究班主催のシンポジウム・講演会における外国人研究者の報告の翻訳を収録する論集。当該の科研費を充当し、水声社より2021年3月刊行予定。いずれの論集についても、すでに執筆者及び論文テーマのラインナップは確定しており、1については2020年9月6日、2については同9月30日を原稿執筆の締め切りとする。

